

# 藤 娘

文政九年(1826)九月

作詞 勝井源八

作曲 四代目杵屋六三郎

〈三下り〉

津の国の 浪花の春は夢なれや 早や二十年の月花を

眺めし筆の色どりも 書き尽くされぬ数々に 山も錦の折を得て

故郷へ飾る袖袂

〔鼓唄〕

若紫に十返りの花をあらはす松の藤浪

人目せき笠 塗笠しゃんと 振りかたげたる一枝は

紫深き水道の水に 染めてうれしきゆかりの色の

いとしと書いて藤の花 エエ しょんがいな

裾もほらほらしどけなく 鏡山人のしがより この身のしがを

かへりみるめの汐なき海に 娘姿の恥かしや

男心の憎いのは ほかの女子に神かけて あはづと三井の <sup>4</sup>かねごとも

堅い誓ひの石山に <sup>5</sup>身は空蟬の <sup>6</sup>から崎や <sup>7</sup>まつ夜をよそに <sup>7</sup>比良の雪

とけて逢瀬の <sup>8</sup>あだ妬ましい ようもの瀬田に <sup>8</sup>わしゃ乗せられて

文も堅田の <sup>9</sup>かた便り <sup>10</sup>心矢橋の <sup>10</sup>かちちごと

〈三下り〉

松を植ゑよなら 有馬の里へ植ゑさんせ

いつまでも 変はらぬ契りかいどり襦で

よれつもつれつまだ寝がたらぬ

宵寝枕のまだ寝が足らぬ 藤にまかれて寝とござる

アア何としようかどしようかいな

わしが小枕 <sup>11</sup>お手枕 <sup>12</sup>

空も霞の夕照りに 名残惜しむ 帰る雁がね

〈本調子〉〔潮来〕

潮来出島の 真菰の中に 菖蒲咲くとは しをらしや

サアよんやさ サアよんやさ

宇治の柴船 早瀬を渡る わたしや君ゆえ のぼり船

サアよんやさ サアよんやさ

花はいろいろ 五色に咲けど 主に見かへる 花はない

サアよんやさ サアよんやさ

花を一もと わすれて来たが あとで咲くやら 開くやら

サアよんやさ サアよんやさ

しなもなく 花に浮かれて ひと踊り

〈三下り〉〔藤音頭〕

藤の花房 色よく長く 可愛いがるとて 酒買って 飲ませたら

うちの男松に からんでしめて

てもさても 十返りという名の憎くや 帰るといふは忌み言葉

花ものいわぬ ためしでも 知らぬそふりは 奈良の京

杉にすぎるも 好きずき 松にまどうも 好きずき

好いて好かれて 離れぬ仲は <sup>13</sup>常磐木の

たち帰らで 君と我とか おお嬉し おおうれし

